

規範と実践に関する研究 — 奄美大島の住宅事例を通して —



K07067 瀧澤 祐太

Keywords

規範 実践
モノ 行為

1. はじめに

住宅は、そこに住む家族の期待や理想が詰まった容器である。居間には一家団欒という期待、子供部屋には子供との正しい関係という期待、寝室には夫婦愛という期待が込められ住宅が計画される。現代の住宅の居室配置は、さまざまな行為(食事、睡眠、調理など)に対応する空間(食堂、寝室、台所など)に理想や期待を添えて、それらをパズルのように組み合わせることができるのである。

しかし、理想と現実はずしも一致しない。住み手は居間を寝室として利用したり、子供部屋や寝室を物置きとして利用したりする。思い描いた間取りと実際の行動のあいだにずれが生じているのである。このずれはなぜ起こるのだろうか。本研究は、『規範』をその住宅が建てられた当初の間取り、『実践』を実際に人がおこなう行為と定義し、これらの相互関係の実態を明らかにすることを研究目的とする。

研究対象地として鹿児島県奄美大島龍郷町のA集落を選定し、フィールドワークを実施した。調査内容は、住宅の実測、住民へのインタビュー、文献・資料収集である。これらのデータからそこに暮らす人々の『規範』と『実践』を抽出し、分析・考察をおこなう。

2. 調査地の概要

2.1 奄美大島龍郷町A集落の概要

調査対象地のA集落は、奄美大島龍郷町の最西部に位置する(図1)。亜熱帯気候・海洋性気候に属し、高温多湿で台風の被害が多い。さらに離島であるという条件の中、独自の生活様式をつくりあげてきた。生業は農業が中心となっていて、主に自給自足である。かつての生業の基盤であった大島紬の生産・販売は、現在あまりおこなわれていない。また、高校生以上になると鹿児島県本土や関東・近畿地方に出稼ぎに出る場合が多い。そして、のちに帰郷する、いわゆる「Uターン」が少ない。



図1 調査地の位置

2.2 伝統的な住宅の空間構成

奄美大島の伝統的な住宅は、敷地内に茅葺き屋根の建物が分散して配置されている。また、台風による被害が多いことから珊瑚の石垣や防風林に囲まれている。その分散して配置された建物は、オモテ(接客空間)、ナンド(儀礼空間)、ネシヨ(就寝空間)で構成される主棟と、トーグラ(団欒・食事・調理空間)で構成される副棟がある(図2)。これらの棟をトイマと呼ばれる渡り廊下が繋ぐ。また、便所、風呂、高倉なども屋敷内に分散して配置されていた。このように伝統的な住宅は、分棟型、茅葺き屋根など独自の様式をつくりあげてきたのである。

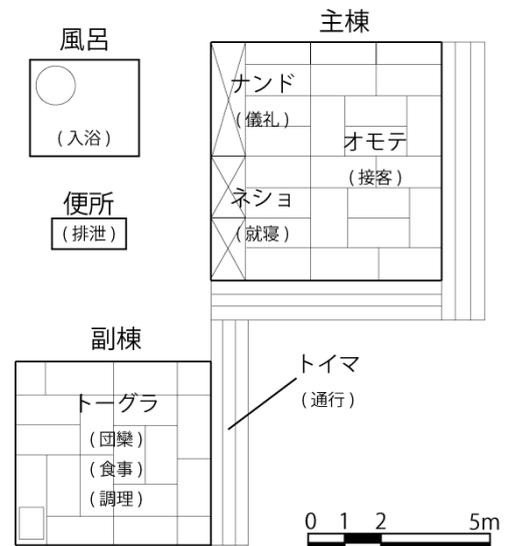


図2 伝統的な住宅の平面構成モデル

3. 住宅の変遷

雪聖子の『奄美大島における住居の研究』によれば、かつては奄美大島特有の住宅のかたちが存在したが、第2次世界大戦以降、そのかたちが変わりつつあるという。変化は大きく5つに分けられる。以下に各変化、要因、背景をまとめる(表1参照)。

(1) トタン葺きの屋根の普及

…昭和29～33年頃、屋根を茅葺きからトタンに葺き替える住宅が増加した。戦後の人口流出と大型の台風が来襲したことにより、集落の共同作業である屋根の葺き替えが困難になったことが要因である。

(2) 玄関の設置

…屋根の葺き替えに併せて、トイマや外縁の一部に玄関を設置する住宅が増加した。住宅へのアクセスは、オモテの外縁から直接出入りする形式をとっていたが、本土の影響を受けて変化したものと考えられる。

(3) 台所の設置

…昭和39年～40年代前半にかけて、社会基盤の整備が急速に進められたため、水廻りの設備が整い始めた。これは、「振興事業」によって、生活水準の向上が計られたことに起因している。水廻りの整備により風呂や便所が内部化され、初期の台所が設置された。

(4) 部屋の増築

…昭和50年代前半になると生活基盤はほぼ整い、人々はより充実した生活を求めるようになった。この頃、トーチラの改造とともに部屋を増築する住宅が増えた。この増築は文教復興による子供の教育の重要視から児童室の重要性が高まったことや、高齢化した住居者の生活に対応した部屋づくりの要求などに起因している。

(5) 建具のつくりかえ

…屋根の葺き替えやトーチラの改造などに伴い、老朽化の激しい縁や建具等が修復・改善された。外縁は内縁になり、板戸の代わりにガラス戸やサッシ等がはめられた。この変化については、従来の建具が台風による被害を受けやすいという外的要因と、部屋の拡張を意図した内的要因が挙げられる。

このように、増改築を重ねてきた住まいは次第に機能が内部化されていったことがわかる。また、時代を経るにしたがって、住まいの形成が利便性を追求した新技術や本土の影響に大きく左右されていったこともわかる。

表1 住宅の年代別変化

年代	住宅の変化	時代背景
明治初期		
昭和20年		終戦
29年 30年	トタン葺き屋根の普及 玄関の設置	大型台風の 来襲 復興事業
40年代	台所の設置	↓ 生活水準の 向上
50年代	部屋の増築 建具のつくりかえ	高齢化 教育社会
平成初期		大型台風の 来襲

4. 『規範』と『実践』

4.1 留意点

本研究の『規範』と『実践』を考えていくにあたって、いくつか留意点がある。まず、本研究の『規範』の定義から、家族の要望を反映している住宅が研究対象として最適だと考えるため、注文住宅であることが条件となる。次に、『実践』を図面に落とし込んでいく作業の際に、各住宅の情報が不足していると十分な研究がおこなえない。そこで、平面図を実測することができた住宅で、かつ『規範』と『実践』について詳しくインタビューすることができた住宅を研究対象とする。これらの留意点にしたがって抽出した計10軒の住宅を主な研究対象とし、本研究の軸である『規範』と『実践』のずれの実態について明らかにしていく。

4.2 『規範』と『実践』の提示

各住宅の『規範』と『実践』を図面に落とし込み、これらを比較したのち、ずれが生じている行為についてすべて書き出していく。下線が引いてある行為が、「実際に人々がおこなっている行為」であり、二重下線が引いてある行為が「実際にはおこなわれていない行為」である。事例として、No.18の住宅を挙げる(図3、図4参照)。

No.18の事例

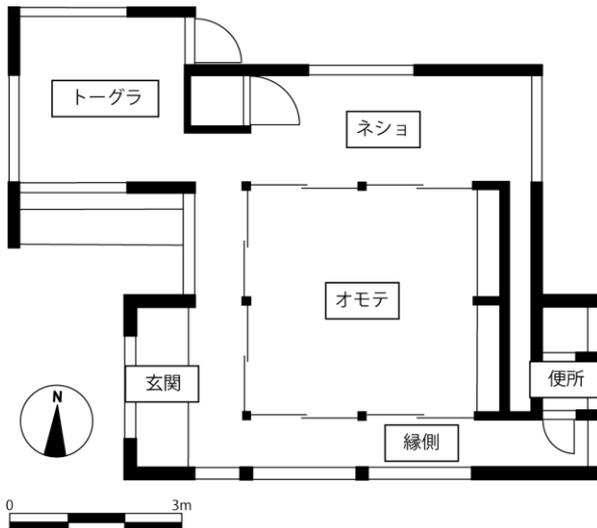


図3 『規範』の諸形態

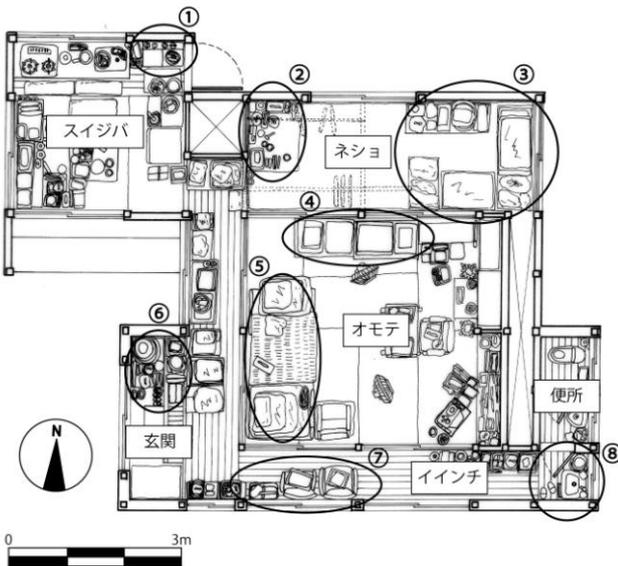


図4 『実践』の諸形態

一規範

「オモテ」は接客、「トーグラ」は食事・調理・団欒、「ネショ」は就寝、「縁側」は通行、「便所」は排泄、「玄関」は出入りを行為として期待していた。

一実践

「オモテ」は接客・睡眠・団欒、「スイジバ」は食事・調理・洗濯、「ネショ」は就寝・収納、「イインチ」は通行・収納・出入り、「便所」は排泄、「玄関」は出入り・収納が実際におこなわれている行為である。

4.3 『規範』と『実践』のずれ

『規範』と『実践』について提示し、分析した結果、全軒において『規範』と『実践』のずれを確認すること

ができた。住宅の居室配置が住み手の行為を想定して好ましい間取りを追究したとしても、実際にはそうした想定を超えた機能展開によって、異なる空間の使い方をすることがあると考えられる。では、果たしてこの『規範』と『実践』のずれは何が原因で起こるものなのだろうか。

4.4 仮説

集計結果から、『規範』と『実践』のずれの中で一番多く挙げられたのが、収納空間の発生である(10軒中9軒)。さまざまなモノが住宅内に溢れだした結果、モノを置く空間がなくなっていき、収納という行為が必要になる傾向があると考えられる。これらのことから、住宅内にあるモノが『規範』と『実践』のずれに関係していると考えた。この仮説を検証するため、10軒についてモノに着目してさらに分析することにする。

5. モノと『実践』

5.1 分析

分析では、モノが『規範』と『実践』のずれに関係していると思われる事例を、清書した図面に描き込んでいく方法をとる。モノによって生じた『規範』と『実践』のずれの事例を以下に記す(図4参照)。また、この仮説をさらに補足するため、平面図を採取することができた残りの41軒の住宅についても同様に分析した。

No.18の事例

- ①「スイジバ」に洗濯機を置いている。
- ②机を押入れの前に置いてしまっているため、扉を開けることが困難になっている。
- ③モノが山ずみになっており、奥の通路(床の間の後ろ)へ行くことが困難になっている。
- ④タンスで「ネショ」と「オモテ」を仕切っているため、この2つの部屋の間を行き来することが出来ない。
- ⑤「オモテ」にあるベッドで寝る。
- ⑥玄関にモノが溢れ、物置きになっている。
- ⑦廊下にモノ(椅子など)が置かれている。
- ⑧洗面台を廊下に置いている。トイレに入る扉が全開できない。

5.2 分析結果

各住宅をモノに着目して分析した結果、主な研究対象である全10軒と、補足として分析した残りの41軒において、モノが『実践』を変化させている事例が数多く存

在した。特に、モノの増加を理由に収納空間が発生した事例が多いことが分かった。ほかにも、「スイジバ」に洗濯機を置くことで、期待していなかった洗濯という行為が加わるという事例がみられた。また、収納空間にモノが入りきらず、収納という行為の範囲が広がった事例もみられた。これらの結果から、行為にはモノが必要であり、反対にモノが行為を促すこともあるといえる(図5参照)。以上のことから、『規範』と『実践』のずれは、モノが関係していると考えられる。

5.3 考察

モノが増加するごとに、普段はあまり使用しない空間や使わなくても日常生活に支障をきたさない空間にモノを押し込んでいく傾向が読み取れる。また、生業や家族の変化などが起きると、モノの価値も変化する。こうして徐々に価値を失っていったモノは、住宅内の端へ端へと収納されていく。もし、収納空間が住宅内に増加し続けたとすると、さまざまな行為に対応する空間が減少することになる。最終的には、ひとつの空間でさまざまな行為をおこなう可能性がある(図6参照)。

5.4 まとめ

奄美大島龍郷町A集落では、モノによって『規範』と『実践』にずれが生じる傾向があるといえる。インタビューによると、近代化の波を受けてここ数年でモノの数が急激に増加し、住民の生活は一気に変わったという。近代化が進み、本土の影響をさらに受ければ、流通がさらに勢いを増し、今後もさらにモノが増えていくことであろう。こうした事態を踏まえ、特に収納空間を確保できる計画が求められるといえる。

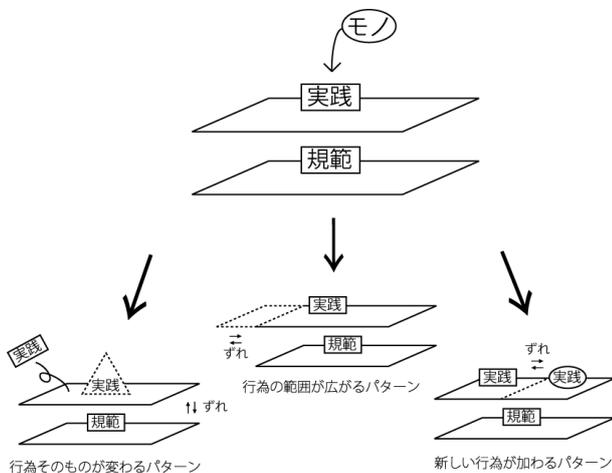


図5 モノによる『実践』の変化

6. おわりに

私たちは日常生活において多くのモノに囲まれて暮らしている。朝起きてから夜寝るまで、家の中にあるさまざまなモノが私たちの行為に深いかかわりを持っている。近代化とともにさまざまなモノがどんどん住宅の中に入ってきて、それらが新しいひとつの景観をつくる。私たちは当たり前のように暮らしているが、モノが私たちの暮らしを支え、また変化させているのである。

本研究は一般的に自明とされる『規範』と『実践』のずれをあえて取り上げた。結局のところ、そこに住む人々の想いを反映した住宅がいかにか計画されようと、当初の思い通りに住むことは難しい。まさに「住宅とは、そこに住む人々の願望や理想が詰まった器である」から、なかなか理想と現実は一致しない。ただ、どれほど環境が変化しても、空間の使い方を上手に変えて人々は創造的に生きている。また、『規範』と『実践』が必ずしも一致しないことを踏まえて、そうしたずれを許容できるような計画が大事ではないだろうか。

参考文献

- ・山本理頭 『住居論』 平凡社 2004年
- ・野村孝文 『南西諸島の民家』 相模書房 1961年
- ・雪聖子 内田文雄 『奄美大島における住居の研究』 日本建築学会中国支部研究報告集 第25巻 2002年 p.789-792
- ・有限会社三立舎 『龍郷町誌 歴史編』 1988年
- ・有限会社三立舎 『龍郷町誌 民族編』 1988年

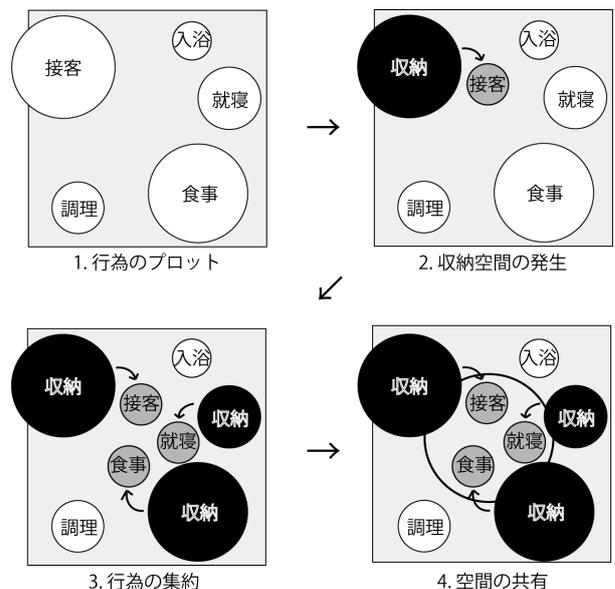


図6 収納空間の発生からくる行為の集約